酒友

粕谷隆夫

●「酒友シリーズ㊽話まで到達したが、そのあとどうするんだ」という問いがありました。考えてみれば好き勝手に書き散らしたものです。この『談話室・水源地』は認知症防止に一役買っていますね。昨年の一月末から書いていますので、最初のころの文章を転載します。

酒友①　宝井其角

この談話室『水源地』のおかげで、博多在住の音楽好きの友人からメールがきた。昔、「ロシア語だけでなくロシア音楽もやれよ、チャイコフスキーならどの作品を選ぶ」と聞かれて、「くるみ割り人形の花のワルツだろう」と答えたら、「相変わらずの俗人だな」と言われました。その彼が今、「チャイコフスキーは五三歳で他界した。あんたさんは酒しかないのだから、君に寄り添った酒の友を振り返ってみたら面白いだろう。人生は短い。もうその時期に差し掛かっているぞ」ときたもんだ。さもありなんと素直に感じました。

其角が愛した古川柳は、「李太白　隣の酒屋　借りだらけ」である。ちゃきちゃきの江戸っ子、時は元禄。「十五から　酒を飲み出て　今日の月」。また「年忘れ　劉伯倫はおぶはれて」と詠み、かれは七賢人の一人を気取っている。微酔にとどまるべしと諭した師匠の芭蕉は、其角に「朝顔に　我れは飯食ふ男かな」という句を送っています。すなわち朝酒をつつしめということ。其角は荻生徂徠をひやかして、「梅が香や　隣は荻生総右衛門」と一発かましております。

でも小生が気に入っているのは、四十七士の大高源吾、富森助右衛門、神崎弥五郎の三人が其角の弟子で、俳号をそれぞれ、子葉、春帆、竹平と持っていたことです。腹を切るのが当たり前という方々と酒を楽しんでいる。かれは友が来ると「到来を　さあと云うまま　酒にして」。客がなければ、「初雪や　十になる子の酒の燗」と、子供を相手にしています。これじゃ良寛和尚に叱られるのではないですか。

「酒を妻　妻を妾の花見かな」は有名な句ですが、其角が亡くなった時、「其の角（つの）の　折れて女鹿の嘆きかな」と詠んだ女房もさすがである。

酒友②　若山牧水

高校時代、授業で「白鳥は哀しからずや　空の青　海のあをにも染まずただよふ」に出会った時の衝撃は、今もなお体の芯に残っております。何人かの男子学生も反応していました。歌の世界は、普通は女生徒が反応するものだが。美術クラブのひとりは見事な絵画世界だと叫んでいたが、小生は、日本人の美感と悲しみを一瞬にして掬い上げ、さらに宮城道雄の「春の海」を奏でないと、白鳥は寒さと孤独で死んでしまうと思いました。

幾山河こえさり行かば寂しさの　終（は）てなむ国ぞ今日も旅ゆく

山奥にひとり獣の死ぬるより　さびしからずや恋の終わりは

旅人は　海の岸なる山かげの　ちひさき町をいま過るなり

この瑞々しい感覚はなんなんだ。図書室にさりげなく何冊もあったのに。「あら、牧水いまごろ気づいたの」。いつもの司書のパンチが効きましたね。明治四十三年は大逆事件の年であり、牧水の登場と共に、啄木の『一握の砂』も出版されました。歴史の大河のなか、ひとは生きる。

しかし、小生の人生の歩みに沿って、あはれ牧水は詩よりも酒の先達になり果てたのだった。牧水の酒好きは血統で、血糖値もあがる。父親、立造は宮崎県下の医師で、往診先で必ず酒をつけてもらった。病人の枕もとで、二合五勺入りの大徳利一本を、世間話をしながら旨そうに飲み干して帰ったそうで、ただそれだけで病人は安心したのである。酒を飲まないで帰った時は、病人への死の宣告であった。祖母のかめは酒屋の娘で、大した飲み手、母の牧女も一升は軽く乾したといいます。

飲むなと叱り叱りながら母がつぐ
うす暗き部屋の夜の酒のいろ

Photo©T.Yoshizawa

酒友③　大町桂月

のちに小生の愚妻となる女学生の実家（下北半島）に初めて顔を出したのは、一九七八年（昭和五三年）の夏でした。床の間の和室に入って驚いたのは、桂月の揮毫を額にしていたことで、欄間を塞いでいた。彼女の祖父に聞くと、「わしが十五歳ごろだから、大正五～六年ごろかな。二～三回泊まっていった記憶がある。親父と囲炉裏で酒を酌み交わしていた。そういえば、馬に乗って旅をしていたよ」。

桂月は国文学が専門だが、十四歳ごろから漢詩を作っている。和漢混在の美文である。旅を愛し、青竹を杖にしていたが、この杖は上から下まで節をすっかり抜いて、これに酒を一杯に詰めていた。酒が無くなると、ひとりで樽をぶらさげて買いに行く気さくな好漢であった。

樽を提げ　夜自ら行く深巷　吠狗を聞く
酒を得て心未だ定まらず　迂路して吟友を呼ぶ

桂月は、酒客によくみられるように、金に対して無欲だった。稿料や印税が入ると、「君たちも貧乏でうまい酒が飲めないだろう」といって、門下や友人をつれて飲み歩いた。「大と小　けじめはあれど酔李白　酔桂月に型似つらむか」と、荒城の月の作者、土井晩翠は歌っています。

小生、この実家の家人に、「蝙蝠傘を腰にさし、手に小さなカメラを持った学者が訊ねてこなかったか」としつこく尋ねたが、ないと言う。というよりも関心がない。もちろん宮本常一のことである。仕方がないので蔵に入れてもらった。大福帳があるので、商家でもないのに不思議だった。さらに古いものは、弘化、嘉永、文久のものがあったが、如何せん文字が大半読み取れなかった。あとで聞いたが、初めて家を訪問して蔵に入るとは、江戸の鼠小僧かと一同笑ったそうである。

酒友④　嵯峨野夫妻

八杉辞典でも、アーストラは、アスター属（しおんなど）と記されていました。（注）翻訳家村野氏が小生に、石川淳の『紫苑物語』の露語本をプレゼントしてくれました。

嵯峨野画伯は、知る人ぞ知る、同人誌「水源地」の創刊号と二号の表紙油絵を描いてくれた佳人です。二科展に六回連続入選したが、その後脱会。「意外とお金がかかるのよ。見栄なんかないしね」。四人姉妹の二番目。小さいときから絵を描くのが好きで、上手い下手は気にしたことはなく、気持ちがスッキリするのがいいと言う。

旦那はペンキ職人。これが男四人兄弟の長男で、親族で塗装会社を経営し、七三歳のとき脳梗塞で倒れ、「ちょうど良いから会社を整理した」と相成りました。夫妻は同年齢なので、現在、七八歳。四人兄弟のうち中の二人は鬼籍に入りました。若い末弟は縁故で規模の大きな建築会社に再就職し（塗装部門）、「サラリーマン、ちょう気楽」ときたもんだ。

軽い脳梗塞だったので、今でも晩酌を欠かさない旦那曰く、「隆夫

Tableau©嵯峨野柳子

君、芸術家とは収入０円、ペンキ屋はお金を稼ぎ、安住の生活を保つのさ」。

画伯の武器はもう一つあり、手料理を作ることが大好きで、これがなければ結婚できなかっただろう。旦那の友人が高瀬舟のある風景画を依頼したら、出来上がった絵がベニスのゴンドラだった。しかし誰も怒らなかったのは不思議でした。

画伯はアトリエがいっぱいになると、「会社に持って行ってもいいわよ」と言ってくれます。年一回【四人会】という仲間で、数寄屋橋の画廊で絵画展を開いているが、「ひとりの方が大金持ちなの、だから経費は心配ないの」と至って気楽。旦那の楽しみは、週に一回、綾瀬駅近くの居酒屋で友人たちと呑む会でしたが、コロナ禍で中止になっているのが残念だという。（この記事は二〇二一年二月五日）

ご両人、「俺は死ぬまで酒を呑む」「私は死ぬまで絵を描く」。

山の音　山の香　春の来つつあり　　（黒木野雨）

酒友㉞　北上夜曲

あれは小生が小学四年生だったから、昭和三六年の初夏のことでした。Ｋ紡南千住工場内には野球グランドがあり、センターの後ろはこんもりした小さな森でした。そこに神社があり、池もある。かたわらの凹みを足で踏むと噴水がチョロとあがります。女子寮は工場内、男子寮は社宅の横にあります。

日曜日の午後、男親たち七～八人がビール瓶と日本酒一升瓶を何本か持ち込み、すき焼きを囲むことになりました。小生を含めて、子供たちも四～五人いましたね。東津軽郡の平内町と秋田県の大曲市出身、すなわち故郷組です。火力はもちろん炭火のコンロ。

酔いがまわってきて歌になったが、また民謡かと思っていたら、全員で、なんと『北上夜曲』を歌い出したのである。男親、すなわち三〇代のおっさん連中です。奇妙な若々しさと安堵感。たしかに周囲に

はほかの大人は誰もいませんでしたが。

匂い優しい　白百合の
濡れているよな　あの瞳
想い出すのは　想い出すのは
北上河原の　月の夜

みんないい顔をしてました。あれは何だったのだろう。あの雰囲気は。「タカ坊、飲め」と言われて手にした琥珀色の液体を一口飲んだが、「ピエー、苦い！」。よくこんなものをグビグビ呑むのか不思議でした。I兄弟もいましたが、近所のおばさん連中は、「弟はチンチクリンだけど、兄さんは男前ね」「だってもと憲兵よ」と話していました。親父は「戦争、日本、負けてよかったんだよ」と小生に時々語りましたが……。

なんかあの頃は騒がしいが明るい庶民の時代でしたね。そして初夏の爽やかさがたっぷりとありましたね。女の人たちは、アンネ、アンネと口にしていました。中学生になって、あれはアンネの日記のことかと考えましたが、アンネナプキンのことでした。

●酒友が④から㉞に飛んだのは、この題名がきっかけで、天道兄が小学六年生時の思い出を鮮明にしたからです。